

# 地域におけるスポーツイベントの事例研究(4)

サザン・セト大島少年サッカー大会参加者の意識調査(2006年と1999年の比較)

幸田三広\*、平畑幸作\*、藤岩秀樹\*\*

## The Case Study of the Sport Event in the Community (4)

A Survey on the Attitudes of Participants in the Southern Seto Oshima Junior Soccer Meeting

Mitsuhiro KOTA, Kosaku HIRAHATA and Hideki FUJIIWA

### Abstract

Our aim of this study is to propose the ideal way of independent community sport events by survey on the attitudes of participants according the events. The subject is leaders who participated in The Southern Seto Oshima Junior Soccer Meeting, which is well organized and dependent on the public administration. As a result of the investigation, it suggests that the team leaders who were involved in the event expressed highly satisfaction for the meeting. But some items of questionnaires indicate that the team leaders who take winning the game seriously tend to be lower on the satisfaction. Several points are discussed for the improvement of access or traffic.

Key words : Community, Sport event, Soccer meeting, Participants

#### 1. はじめに

近年、さまざまな競技のビッグイベントが日本各地で開催されるようになり、その開催により地域の活性化や競技力の向上が図られている。今年(2007年)8月に「世界陸上2007」が大阪で開催されたことは記憶に新しい。サッカー界では、2002(平成14)年にFIFAワールドカップが日韓共同で開催され、日本代表の活躍もあってサッカー人気を絶大なものにした。人気のきっかけとなったのは、1993(平成5)年のJリーグ(プロサッカーリーグ)発足で、サッカーブームが巻き起こると競技人口が急増し、それに伴い各地でサッカー大会が開催されるようになった。

山口県大島郡で開催されている「サザン・セト大島少年サッカー大会(以下、「サザン・セト大会」と略称)」は、こうした時代の流れを背景に、少子高齢化と過疎が進む瀬戸内海の島の活性化を目的として1997(平成9)年、旧4町(久賀町、大島町、東和町、橘町)共同開催により、全国から48チームを迎えてスタートしたスポーツイベントであった。

サザン・セト大会についての概要は、すでに本校紀要第36号(2003年)において、「地域におけるスポーツイベントの事例研究(1)」<sup>2)</sup>として、開催経緯と現状について述べている。また「地域におけるスポーツイベントの事例研究(2)」<sup>3)</sup>として、その効果と課題についても述べている。よってここではその説明を省略する。



写真1. 第10回記念大会開会式(選手宣誓)

折本ら<sup>1)</sup>は、第3回大会を終えたサザン・セト大会参加チームの指導者への調査から、大会に対する参加者の満足度が高いことで、行政主導でスタートしたこのスポーツイベントを一応の成功と捉え、今後は地域が中心となって企画・運営しそれを行政がバックアップするといった地域主導型の大会にしていくことが望ましいと提言している。

筆者ら<sup>2)3)</sup>は、第5回大会を終えたサザン・セト大会の調査から、全国トップレベルの清水FC(静岡県)の大会参加を目玉とした様々な要素がサザン・セト大会の特徴となっており、参加者の満足を得る結果につながり、スポーツイベントとしての成功に向かっている、しかし地域活性化の効果は明らかではない、としている。

第8回大会を終えた2004(平成16)年10月に旧4町が合併となり、新しく誕生した周防大島町が第9回大会以降を引き継ぎ開催している。2006(平成18)年3月には第10回記念大会を無事に終え地域スポーツイベントとして一応の成功を見た。

本調査研究では、地域活性化のため行政主導で始まったスポーツイベントが節目となる第10回大会を終え、今後地域に根ざした市民主導型のイベントに成長していくためには、どのような企画・運営のあり方が必要か検討を加えるため、第1回～10回大会の参加チームへアンケート調査を実施した。そして今回の調査結果と第3回大会を終えた時点での前回調査結果(1999年)とを比較検討することで、大会参加者の意識の変化を浮き彫りにし、今後の大会運営の方向性を示唆する基礎資料を得ることを目的とした。

## 2. 方法

本調査では、西日本を中心とした全国少年サッカー大会「サザン・セト大島少年サッカー大会」(周防大島町)の第1回～10回大会の参加者を対象にアンケート調査を実施した。

### 2.1 調査の内容

質問紙(45項目)の主な内容は、以下の通りである。

- (1) 指導者・チームのプロフィール
- (2) 大会運営について(満足度)
- (3) 大会の企画について(満足度)
- (4) 大会の現状と課題について
- (5) プロサッカーとの関わりについて
- (6) ビッグイベントとの関わりについて

### 2.2 期間

質問紙は2006年7月10日に発送し、回収は2006年7月31日までに回答用紙を各チームまとめて返送してもらう郵送法をとった。

### 2.3 対象

第1回大会(1997年)から、第10回記念大会(2006年)まで出場した全チーム(127団体)の監督、コーチ、代表者、保護者を対象とした。対象者は508名であった。

### 2.4 回答

発送した127団体から宛先不明の18団体を除く109団体のうち、45団体から108件の回答を得た。

団体の回収率は41.3%、回答用紙の回収率は24.8%であった。

### 2.5 分析

それぞれの項目については単純集計を行った。クロス分析では<sup>2</sup>検定により変数間の関連性を検討した。

## 3. 結果および考察

### 3.1 回答者のプロフィール

表1は、2006年と1999年調査における回答者の内訳を実数と比率で示したものである。回答者は監督、コーチ、代表者、保護者、その他で区分している。

役職	回答数(%)	
	2006年	1999年
監督	26(24.1)	30(20.1)
コーチ	27(25.0)	43(28.9)
代表者	17(15.7)	15(10.1)
保護者	33(30.6)	58(38.9)
その他	5(4.6)	3(2.0)
計	108(100.0)	149(100.0)

### 3.2 男女比と役職との関わり

図1は、2006年と1999年調査における回答者の役職について、その比率を性別にまとめたものである。

2006年では、男性の役職として、監督31.7%、コーチ31.7%、代表者18.3%、保護者13.4%、その他4.9%で、6割以上が指導者としての役割であった。女性は、監督0.0%、コーチ3.8%、代表

者7.7%、保護者84.6%で、ほとんどが保護者として参加している。これらは1999年の調査とほぼ同様の結果であった。女子のサッカー競技人口も近年増加しているが、指導者になるケースはまだまだ少なく、本調査の結果からも役職に対する男女の割合は現在も変わっていないようである。

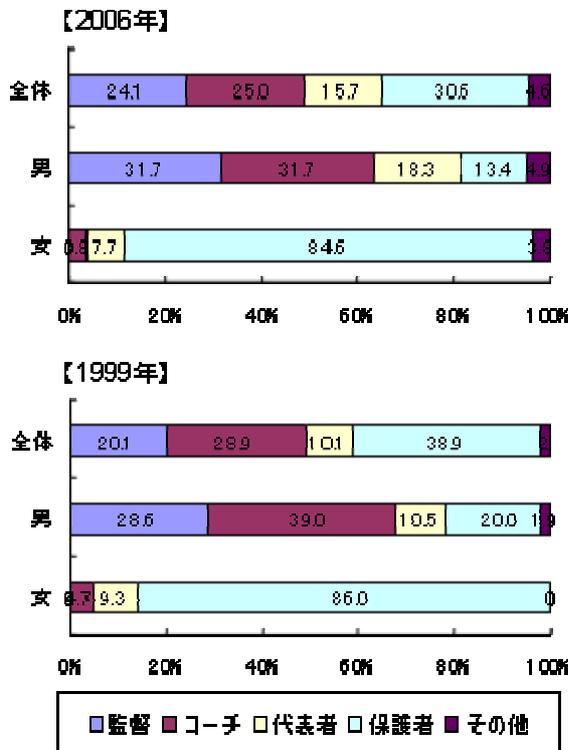


図1.男女比と役職

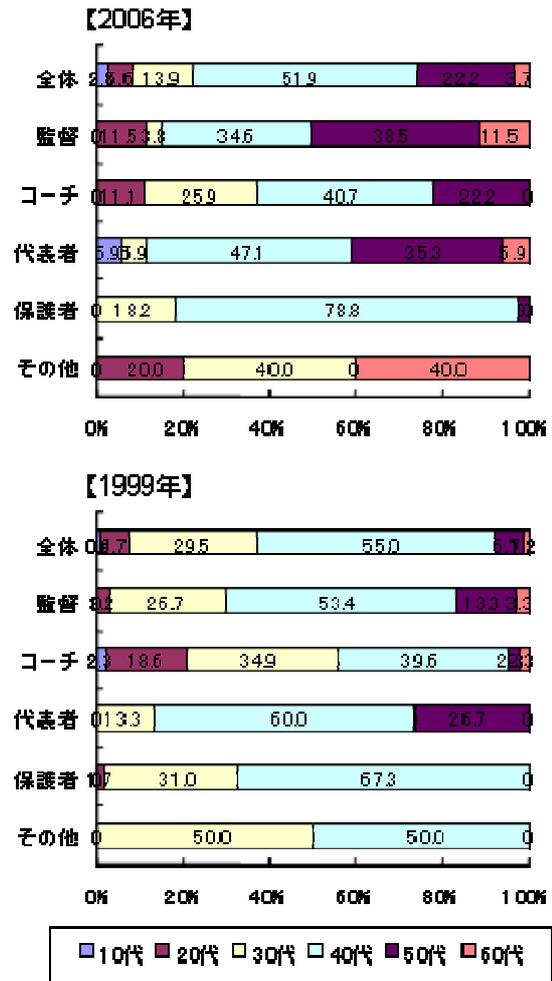


図2.役職と年代

### 3.3 役職と年代との関わり

図2は、2006年と1999年調査におけるそれぞれの役職に占める年代別比率を示したものである。

2006年では、監督は30歳代3.8%、40歳代34.6%、50歳代38.5%と、年齢が上がるにつれその割合が増加する傾向にある。代表者は、30歳代5.9%、40歳代47.1%、50歳代35.3%で、40歳代が最も多い。コーチは、20歳代11.1%、30歳代25.9%、40歳代40.7%、50歳代22.2%で、比較的若い年代にその割合が多いことがわかる ( $p < 0.001$ )。

この結果を1999年調査時のものと比較すると、監督で最も割合の多い年代は2006年では50代、1999年では40代であった。コーチや代表者では50代の割合が1999年に比べ2006年で顕著に増加していた。この結果から、それぞれの役職に共通して言えることは、明らかに高齢化が進んでいることである。指導者の世代交代がうまく行かず、後継者の育成に苦勞するチームの現状が窺える。

### 3.4 役職と所持資格との関わり

図3は、2006年と1999年調査における所持資格について役職別に比率をまとめたものである。

2006年では、「資格を持っていない」役職は、監督3.8%、コーチ40.7%、代表者52.9%であり、保護者では90.6%が非資格所持者であった。<sup>2</sup> 検定の結果、これら役職と所持資格の関係には有意な偏りが確認された ( $p < 0.01$ )。

また、このような結果は1999年の調査時においても同様の傾向であったことがわかる。しかしながら2006年の調査では、非資格所持者の割合が監督22.8%減、コーチ19.7%減、代表者20.4%減、保護者7.7%減と明らかに減少し、チームの指導に関わる資格所持者の割合が2割程度増加していることがわかる。

前回調査以前は、チームの指導者に指導者資格の所持が義務付けられていなかったが、1987年に文部省(当時)による社会体育指導者資格が制定されると、日本サッカー協会でも指導者資格が整

備され、チームには必ず指導者資格保持者を有することを義務付けたことが資格所持者増加の大きな要因になったと推察できる。

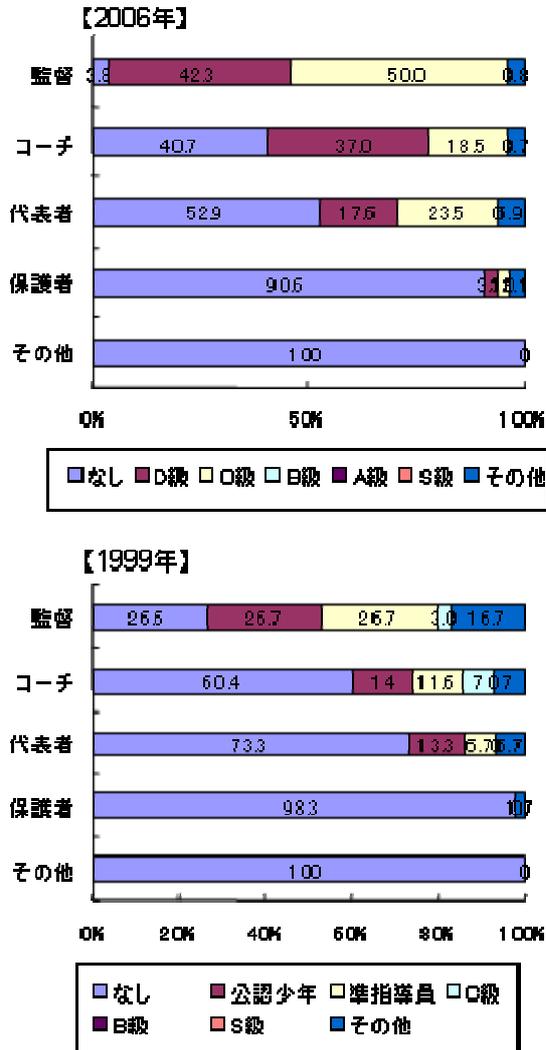


図3. 役職と所持資格

### 3.5 参加者の満足度

表2(2006年)、表3(1999年)は、大会運営に対する満足度についてその比率をまとめたものである。それぞれ満足度の高い順に項目をあげている。

表2(2006年)で、「満足」と回答した割合が最も多かったのは、「子供達の反応」84.3%、次に「保護者の反応」66.4%、「指導者の反応」67.3%であった。表3(1999年)と比べ満足度の割合がそれぞれ増加しており、第10回を終えた現在でも大会参加者から高い満足を得ている。続いて「送迎バス」64.6%、「事務局の対応」58.5%、「開催時期」56.5%となっている。特に開催時期の満足度が前回調査の38.3%に比べ非常に高くなっている。当初期日

固定の開催であったものを曜日固定とするなど、反省点を改善してきた点を評価された形となった。

逆に「不満」と回答した割合が最も多かったのは、「交通の便」25.0%、次に「監督者交流会」18.8%、「開会式」15.9%、「閉会式」15.7%、「決勝戦の観戦」14.8%、「昼食」13.9%、と続いていた。交通の便への不満は、前回と比べるとその割合が増加している。その要因は、会場が4カ所に分かれていること、順位によって2日目以降会場を移動しなければならないこと、送迎バスの利用が県外チームに限定されたことなどが考えられる。監督者交流会は監督者会議と併せて大会前日(平日夕方)に開催されるため、仕事で参加したくても参加できない、もしくは無理を押しての参加となっており、前回も同様の結果であった。そして開・閉会式や決勝戦の観戦など全チームが参加する項目に関する不満の割合が他の項目に比べて高いのは、移動による負担増と島の出入り口が一ヶ所という離島ならではの道路事情によるものと推察できる。また第1回～第8回大会まで旧4町での開催であった開会式が、第9回、第10回大会は総合開会式となったことも一因であろう。昼食(弁当)に関しては、複数の業者で近年その内容にばらつきが見られるようになったことが原因と考えられ、いっそうの企業努力が望まれる。

表2. 大会についての満足度(2006年) (%)

項目	満足	ふつう	不満
1 子供達の反応	84.3	15.7	0.0
2 指導者の反応	67.3	30.8	1.9
3 保護者の反応	66.4	32.7	0.9
4 送迎バス	64.6	33.8	1.5
5 事務局の対応	58.5	40.6	0.9
6 開催時期	56.5	35.2	8.3
7 会場設備	48.1	50.0	1.9
8 決勝戦の観戦	47.2	38.0	14.8
9 対戦方法	39.8	56.5	3.7
10 審判	38.0	59.3	2.8
11 宿泊所	33.0	55.7	11.3
12 記念品グッズ	30.6	63.9	5.6
13 開会式	29.0	55.1	15.9
14 閉会式	27.8	56.5	15.7
15 監督者交流会	19.8	61.4	18.8
16 昼食	16.7	69.4	13.9
17 交通の便	10.2	64.8	25.0
18 試合時間	6.5	91.7	1.9
19 試合数	5.6	88.0	6.5
20 選手交流会	実施なし		

表3. 大会についての満足度(1999年) (%)

項目	満足	ふつう	不満
1 試合時間	89.3	0.7	10.0
2 試合数	87.2	4.7	8.1
3 子供達の反応	81.2	16.8	2.0
4 保護者の反応	62.2	34.5	3.3
5 指導者の反応	59.9	36.7	3.4
6 決勝戦の観戦	59.5	27.0	13.5
7 事務局の対応	58.8	41.2	0.0
8 送迎バス	50.3	49.7	0.0
9 開会式	45.0	51.7	3.3
10 閉会式	42.9	42.2	14.9
11 宿泊所	42.7	49.0	8.3
12 会場設備	42.3	54.4	3.3
13 対戦方法	41.9	56.8	1.3
14 交通の便	40.3	54.4	5.3
15 開催時期	38.3	38.3	23.4
16 審判	32.9	50.3	16.8
17 選手交流会	31.5	41.1	27.4
18 監督者交流会	29.9	56.2	13.9
19 昼食	29.3	60.5	10.2
20 記念品グッズ	23.6	67.6	8.8

各チームの大会参加目的の違いによって、チームの満足度は大きく異なってくるが、チームレベルの違いによる満足度はどう違ってくるのだろうか。

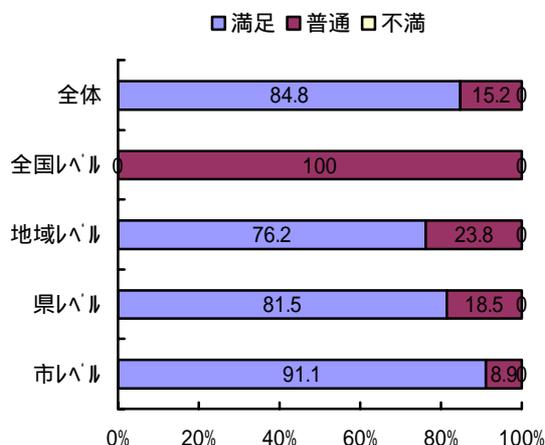


図4. チームレベルと子どもの満足度(2006年)

図4(2006年)は、子どもたちの満足度をチームレベル別にその割合をまとめたものである。

全体的に高い満足度を示している。地域大会レベルよりも県大会レベル、さらに市町村大会レベルでの満足度が高くなっている。普段から高いレベルで競技するチームはサザン・セト大会のよう

な全国規模の大会に参加する機会があるが、市町村大会レベルのチームでは、この大会が1年に1度の全国規模の大会参加というところが多く、参加することで高い満足を得ているようである。

#### 4. まとめ

本研究の結果、以下の知見を得た。

##### 4.1 回答者のプロフィールから

本調査(2006年)の回答者の性別や役職の比率は、前回調査(1999年)とほぼ変わっていないが、その年齢では明らかに高齢化が進んでおり指導者の世代交代がなされていない。しかしながら、日本サッカー協会の取り組みもあって指導者の有資格者は2割程度増加しておりチームのレベルアップに寄与しているものと思われる。自チーム出身者などから指導の後継者を育成し円滑な世代交代をすることでチームの維持と本大会への参加継続を期待したい。

##### 4.2 参加者の満足度から

1)選手、指導者、保護者のいずれの場合もサザン・セト大会に対する満足度は非常に高く、その傾向は現在も変わらない。

2)事務局アンケートなどによる反省を踏まえ、開催時期の再検討や記念グッズの改良、送迎バスの継続などからこれらの満足度の向上を図ることができた。

3)交通の便に対する満足度が非常に低くなっており、さらに全チームが集う式典などの項目において満足度の低下が顕著であった。会場移動によるチームへの負担増や道路事情による交通渋滞を今後どう改善していくかが課題である。



写真2. 第10回記念大会に優勝した周東FC(山口県)

## 引用・参考文献

- [1] 折本浩一、幸田三広、谷岡憲三、田口節芳、富永徳幸：生涯スポーツ時代におけるスポーツ指導者の意識 - 少年サッカー大会のあり方を中心に -、広島体育学研究、第 26 巻、pp.67~77、2000 .
- [2] 幸田三広、菱山士朗、藤岩秀樹、折本浩一、平松 携、平畑幸作：地域におけるスポーツイベントの事例研究(1) - サザン・セット大島少年サッカー大会の開催経緯と現状 -、大島商船高等専門学校紀要、第 36 号、pp.85~90、2003 .
- [3] 幸田三広、菱山士朗、藤岩秀樹、折本浩一、平松 携、平畑幸作：地域におけるスポーツイベントの事例研究(2) - サザン・セット大島少年サッカー大会がもたらした効果と課題 -、大島商船高等専門学校紀要、第 36 号、pp.91~96、2003 .
- [4] 幸田三広、平畑幸作、藤岩秀樹、折本浩一、平松 携：地域におけるスポーツイベントの事例研究(3) - 古市杯バレーボール交歓会参加者の満足度から -、大島商船高等専門学校紀要、第 37 号、pp.83~86、2004 .
- [5] 保健体育審議会(答申)：スポーツ振興基本計画の在り方について - 豊かなスポーツ環境を目指して -、2000 .
- [6] 山口泰雄：地域社会の活性化とスポーツクラブ、スポーツと健康 30(12)、1998.
- [7] 山口泰雄：スポーツイベントの現状と参加者の視点、みんなのスポーツ 153、1992.
- [8] 北村尚浩、川西正志、波多野義郎、柳 敏晴、萩裕美子、前田博子、野川春夫：生涯スポーツイベント参加者の大会満足度 菜の花マラソン参加者のスポーツライフスタイルによる比較、鹿屋体育大学学術研究紀要、第 22 号、2000.
- [9] 北村尚浩、野川春夫、柳 敏晴、川西正志、萩裕美子、前田博子：スポーツイベントによる地域活性化への効果 開催地住民の評価に着目して、鹿屋体育大学学術研究紀要、第 17 号、1997.
- [10] 野川春夫、菊池秀夫、山口泰雄、長ヶ原 誠：スポーツイベントのマネジメントに関する研究(1) イベント参加者の視点から、鹿屋体育大学研究紀要、第 6 号、1991.
- [11] 菊池秀夫、野川春夫、山口泰雄、長ヶ原 誠：スポーツイベントのマネジメントに関する研究(3) 地域活性化の視点から、鹿屋体育大学研究紀要、第 6 号、1991.